

研究報告

看護師のプロフェッショナリズムに関する 研究の動向

Trends in Research for Nursing Professionalism

刈谷 奈緒子^{*1} 小倉 邦子^{*1} 水戸 美津子^{*1}
Naoko Kariya^{*1}, Kuniko Ogura^{*1}, Mitsuko Mito^{*1}

キーワード：看護師、プロフェッショナリズム、専門職

要 旨

〔目的〕 看護師のプロフェッショナリズムについて国内の文献を概観し、看護師のプロフェッショナリズムに関する研究の動向と今後の課題を明らかにする。

〔方法〕 医学中央雑誌 Web 版および Google Scholar を用いて「看護」「プロフェッショナリズム」のキーワードで検索し、193 件の文献で概観を捉え、17 件の研究論文で看護師のプロフェッショナリズムに関する研究の動向を検討した。

〔結果〕 看護師のプロフェッショナリズムに関する文献は、1980 年から発表されており、以後の文献数は少ないが、2016 年以降は増加傾向にある。文献種別は、2018 年以降は研究論文が増加している。研究論文は、テーマ、目的、結果の内容から、【看護師のプロフェッショナリズムの概念】、【看護実践におけるプロフェッショナリズム】、【看護師のプロフェッショナリズムに関する教育】、【看護師のプロフェッショナリズムの評価尺度】の4つのカテゴリーに分類された。

〔考察〕 看護師のプロフェッショナリズムに関する文献が増加傾向にあるのは、文部科学省が2017年に公表した「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」に看護系人材育成において基本的な資質・能力の一つとしてプロフェッショナリズムが明記されたことが要因として推察され、今後も研究が発展していくと考える。これまでの研究で、看護師のプロフェッショナリズムの概念については、自律性、公共性などの普遍的な概念とともに、新しい概念が提起されており、これからも時代の変化や社会の要請に応じたプロフェッショナリズムを探究していく必要がある。今後の課題は、看護基礎教育および現任教育におけるプロフェッショナリズム形成の方略について検討していくことである。

*1：聖徳大学看護学部看護学科 Seitoku University, faculty of Nursing

I. 研究の背景

我が国は少子高齢化の急速な進展に伴い、疾病構造が変化し、医療の高度化、専門化が進んでいる。医療は治療から予防へ変化し、医療の場が病院から在宅へ移行しつつある。また、患者主体の医療が求められるなど、医療を取り巻く変化から、看護師に多様な役割が求められ、質の高い看護が社会から期待されている。看護基礎教育においては、2017年に文部科学省から「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」が公表された。この報告書では大学における「看護系人材育成において基本的な資質・能力」の一つとして「プロフェッショナリズム (professionalism)」が明記され¹⁾、「あらゆる発達段階、健康レベル、生活の場にある人々の健康で幸福な生活の実現に貢献することとし、人々の尊厳を擁護する看護を実現し、その基盤となる看護学の発展や必要な役割の創造に寄与することを学ぶ」としている¹⁾。

職業社会学における専門職研究は、1930年代頃から英米における医師、法律家、大学教師などの専門職の意識が高まり専門職についての議論が本格的に始まった。そこでは、専門性・自律性など専門職 (profession) の特性とはどのような職業を指すのかについて議論されてきた。医師会のような専門職団体の影響もあり、並行して多くの職業の専門家が学問的関心を高めた。その結果、医師、法律家、大学教師などの特徴を基に理念的に専門職が定義され、それ以降はその規定によって種々の職業が分析されるようになった²⁾。

近年、医学の領域においてもプロフェッショナリズムの重要性が認識され、研究が進められている。この背景として、永山³⁾は、「医師達が患者の福利への伝統的な献身から逸脱し、社会との契約に違反していることや、医療と社会とのかかわり合いが増大かつ複雑化したことにある。また、近年における専門分化や、医療技術の発達、医療費の増大、医療ミスの増加、医療受給システムの変化などに伴い、医師としての責務遂行が危機に瀕し、医のプロフェッショナリズムを医師全体としてあるいは専門科別に明文化し、進むべき方向を示す必要が生じた」と指摘している。プロフェッショナリズムに関する動きは日本だけでなく、米欧の内科系専門医3団体（米国内科専門医認定機構

財団・米国内科学会・ヨーロッパ内科学会）が2002年に「医師憲章」として「新ミレニアムにおける医のプロフェッショナリズム」を発表し、医師のあり方を示すグローバル・スタンダードとして認知されている。それらの動きを受けて2015年に日本医学教育学会が「医師の資質・能力としてのプロフェッショナリズム」をまとめ、医師に必要とされる能力や資質としてプロフェッショナリズムを定義し教育のアウトカム指標として位置づけた⁴⁾。

一方、看護に目を向けると、看護師が専門職として確立した職業であるか否かについては、現在でも議論されている。高田⁴⁾は、看護師が半専門職とされてきた課題を、看護師の業務が医師の指示から完全に自律することが困難な点、専門職業に相応する高い教育水準、高い社会的評価が獲得されていない点などがあると述べた。このことを踏まえて浅香⁵⁾は、「看護師が半専門職の代表職種と論じられて約60年が経過し、専門職に近づいた部分もあるが、半専門職のままである点も多くある」と述べている。看護師は専門職としての確立のため、長い年月努力し続けている。約60年前に指摘された課題は現在の状況とも重なる部分が多く、看護師の専門職化に関する課題は完全に解決したとは言い難い現状である。浅香⁵⁾は、「時代と共に医療を含め様々な社会の変化に伴い、看護師の専門職性は大きく変化してきている。専門職と言われる職種のあり方も変化しており、60年前の完全性専門職と半専門職との関係性およびその意味は変わってきている」と述べている。看護職は、専門職か半専門職かと問うことよりも、変化する社会や医療と向き合い、課題とされている問題を一つひとつ解決できるように取り組んでいくことが大切であると考えられる。

看護職の中では、医療の高度化・専門化や国民の健康に対する関心の高まりを受けて看護師の資格取得後にさらに研修及び試験を受ける資格認定制度が発足している。看護師は約120万人いるうち、スペシャリストといわれている専門看護師、認定看護師の人数は2% (24,580人、専門看護師2,733人、認定看護師21,847人) (2020年)⁶⁾である。また、2015年には2025年問題に向けて一定の診療の補助を行う看護師の養成と、確保に向けて、特定行為に関わる看護師研修制度が開始された。スペシャリストや特定行

為研修の修了者は、専門分化した特定の看護領域で必要とされる体系的な知識・技術の学習・認定システムが整備されていること等の理由から、注目が集まりやすい傾向があると考えられる。しかし、大部分の看護職はジェネラリストとして活動し看護の質と量を支えている。日本看護協会⁷⁾は、ジェネラリストについて、特定の専門あるいは看護分野にかかわらず、どのような対象者に対しても経験と継続教育によって習得した多くの暗黙知に基づき、その場に応じた知識・技術・能力を発揮できる活動をしている者とし、ジェネラリストとしての価値を明らかにしている。また、ジェネラリストとしての役割については、スペシャリストにタイミングよく相談できる優れたジェネラリストの存在が必要不可欠であり、スペシャリストとタイミングよく協働できるジェネラリストの手腕が問われるようになった⁷⁾。そのため、益々ジェネラリストの存在意義が大きくなっている。しかし、林ら⁷⁾は、「役職を持たない看護師は、ジェネラリストと認識している者は少なかった。また、ジェネラリストであるかについて、役職を持たない看護師は経験、知識がジェネラリストとしての判断基準になっている。また、経験年数5年以上経過しても自分の実践に自信が持てない者がいることがわかった」と述べている。これらのことから、ジェネラリスト自身が自覚と価値を見いだせず、役割を果たせていないのではないかと考える。看護職者の中では、ジェネラリストの認知度は低く、スペシャリストの相対概念として捉え、スペシャリスト以外の看護職や中堅看護師、キャリア中期ととらえ、ジェネラリストの役割や責任が曖昧である。そのことから、ジェネラリストの学習経験が、知識や技術の体系として形成されにくく、評価が十分でないという課題がある。看護職個々が、自らの目標を持ち、主体的に能力や成果を活用できるように、プロフェッショナリズムを育み、誇りをもって働き続けることで、価値を見だし、自律した看護を実践することが求められる。

II. 研究目的

看護師のプロフェッショナリズムについて国内の文献を概観し、看護のプロフェッショナリズムに関

する研究の動向と今後の課題を明らかにする。

III. 用語の操作的定義

1. プロフェッショナリズム (professionalism) : 専門職を特徴づけている価値や目標, 社会からの期待などの特性を踏まえた専門職としての考え及び態度。「専門職性」「専門職意識」を同義語とする。
2. 専門職 (profession) : 特有の体系化された知識と技術を有する仕事

IV. 研究方法

1. 検索方法

文献検索データベース医学中央雑誌 Web 版 (以下医中誌) を用いて、キーワード検索を行った (1980年~2021年9月)。医中誌収載誌に含まれない文献を Google Scholar で検索した。

2. 分析対象文献の選択と分析方法

1) 看護のプロフェッショナリズムに関する文献

医中誌による「看護」「プロフェッショナリズム」の検索で193件であった。(検索日:2021年9月28日) 文献の発行年、対象者、文献種別により動向を分析した。

2) 看護師のプロフェッショナリズムに関する研究論文

上記の193件から研究論文8件、「看護」「professionalism」で検索し研究論文を抽出し、「看護」「プロフェッショナリズム」と重複していない研究論文を1件、Google Scholar (約550件) から学術雑誌に掲載の研究論文8件抽出し、計17件を対象とした。文献の抽出プロセスについて図1に示した。対象文献を精読し、目的、結果の内容からカテゴリーに分類し、動向を分析した。

3. 倫理的配慮

文献の取り扱いは、著作権を侵害することがないように配慮し、原文に忠実であることに努めて引用した。

V. 結果

看護のプロフェッショナリズムに関する文献は193

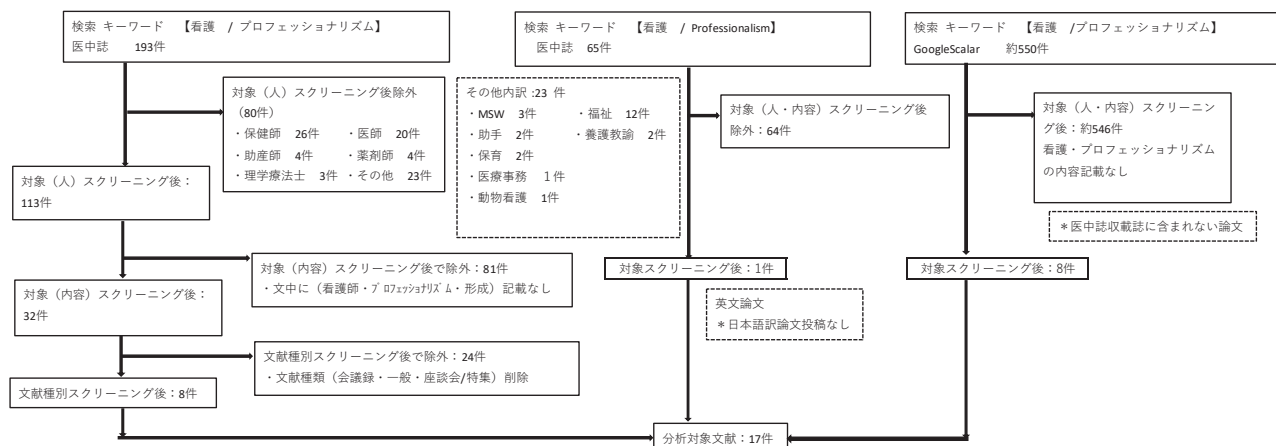


図1 分析対象文献の選定プロセス

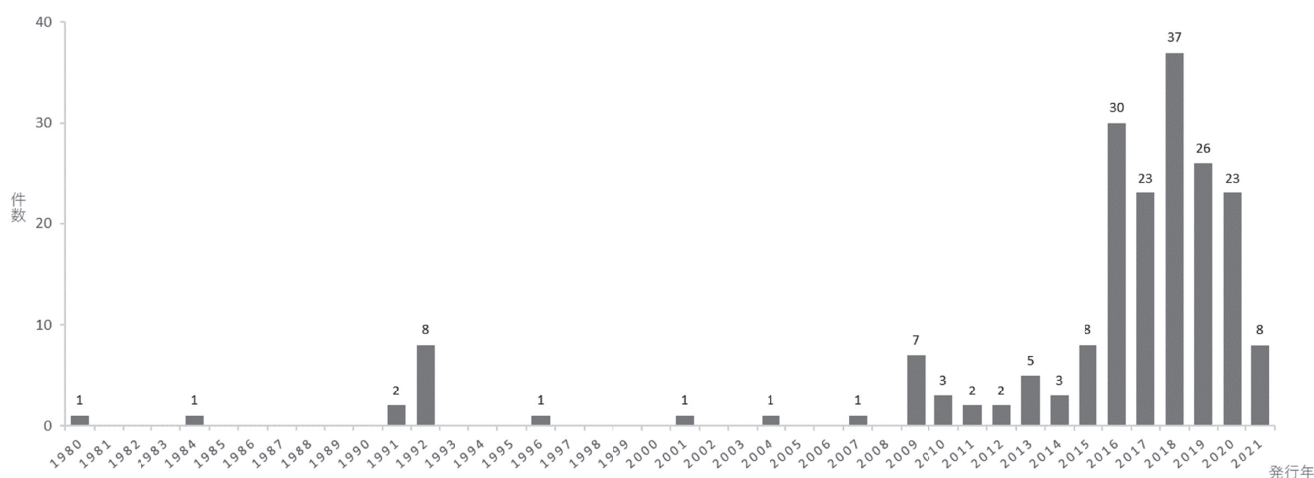


図2 発行年別の推移

件であった。

1. 看護のプロフェッショナリズムに関する文献

1) 発行年別の推移 (図2)

発行年別の文献数は、1980年1件、1981～1983年0件、1984年1件、1985～1990年0件、1991年2件、1992年8件であった。1993～1995年0件、1996年1件、1997年～2000年0件、2001年1件、2002年～2003年0件、2004年1件、2005年～2006年0件、2007年1件、2008年0件、2009年～2015年2件～8件、2016年～2020年23件～37件、2021年(9月まで)8件であった。

2) 文献の対象者別の分類 (図3)

文献の研究対象者別に分類した。

看護師113件、保健師26件、医師20件、助産師4件、薬剤師4件、理学療法士3件、その他(MSW3件、看護助手2件、養護教諭2件、医療事務1件、動物看護1件、福祉12件、保育2件)23件であった。

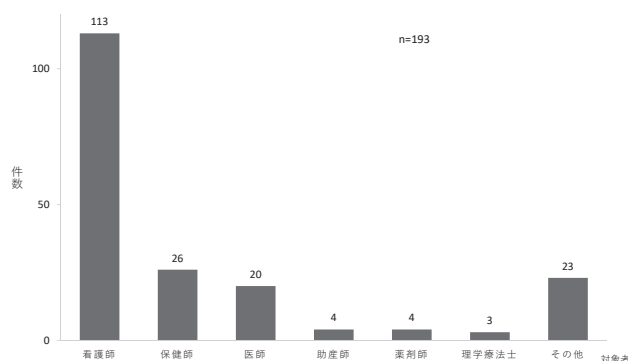


図3 対象者別の分類

3) 文献種別

研究対象文献の医中誌分類による文献種別と看護師のプロフェッショナリズムに関する報告等を表1に示す。看護師のプロフェッショナリズムに関する報告書等では、認定看護師、専門看護師、特定行為研修制度、看護基礎教育における看護モデル・コア・カリキュラムの変遷を対象文献の発行年に沿って記載した。

表1 発行年別の文献種別と看護師のプロフェッショナリズムに関する報告書等

発行年	文献数	原著	総説	解説	会議録	座談会	一般	看護師のプロフェッショナリズムに関する報告書等
1980	1	1	0	0	0	0	0	
1981	0	0	0	0	0	0	0	
1982	0	0	0	0	0	0	0	
1983	0	0	0	0	0	0	0	
1984	1	0	0	0	1	0	0	
1985	0	0	0	0	0	0	0	
1986	0	0	0	0	0	0	0	
1987	0	0	0	0	0	0	0	・看護制度検討会報告書（厚生省） ・看護師制度設立に関する検討開始（日本看護協会）
1988	0	0	0	0	0	0	0	
1989	0	0	0	0	0	0	0	
1990	0	0	0	0	0	0	0	
1991	2	0	0	2	0	0	0	
1992	8	0	0	8	0	0	0	・「看護師等の人材確保の促進に関する法律」公布
1993	0	0	0	0	0	0	0	・専門看護婦(士) 資格 認定制度検討委員会報告書（日本看護協会） ・認定看護管理者ファーストレベル教育開始（日本看護協会）
1994	0	0	0	0	0	0	0	・専門看護師制度設立に関する検討 開始（日本看護協会） ・認定看護管理者セカンドレベル教育開始（日本看護協会）
1995	0	0	0	0	0	0	0	
1996	1	0	0	0	0	0	1	・看護管理者資格認定制度の検討開始（日本看護協会）
1997	0	0	0	0	0	0	0	
1998	0	0	0	0	0	0	0	・認定看護管理者制度発足（日本看護協会） ・認定看護管理者サードレベル教育開始（日本看護協会）
1999	0	0	0	0	0	0	0	
2000	0	0	0	0	0	0	0	
2001	1	0	0	1	0	0	0	
2002	0	0	0	0	0	0	0	・新たな看護のあり方に関する検討会開催・報告書（厚生労働省）
2003	0	0	0	0	0	0	0	
2004	1	0	0	1	0	0	0	・「看護学教育の在り方に関する検討会」報告（文部科学省）
2005	0	0	0	0	0	0	0	
2006	0	0	0	0	0	0	0	
2007	1	0	0	1	0	0	0	
2008	0	0	0	0	0	0	0	
2009	7	0	0	5	1	1	0	・学士課程における看護学基礎カリキュラムによる看護学教育の今後の在り方報告（文部科学省）
2010	3	0	0	1	2	0	0	
2011	2	0	0	1	1	0	0	・「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会」報告書（文部科学省）
2012	2	0	0	0	2	0	0	
2013	5	2	0	2	1	0	0	
2014	3	0	0	2	1	0	0	
2015	8	2	0	3	3	0	0	・特定行為に係る看護師の研修制度（厚生労働省）
2016	30	1	3	22	4	0	0	・「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会」再設置（文部科学省）
2017	23	2	0	16	4	1	0	・「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」として取りまとめられた（文部科学省）
2018	37	7	0	21	7	2	0	
2019	26	4	0	14	7	1	0	
2020	23	5	1	10	7	0	0	
2021	8	0	0	3	5	0	0	
計	193	24	4	113	46	5	1	

表2 看護師のプロフェッショナルリズムに関する研究の動向
n=17

カテゴリー	NO	著者	テーマ	目的	結果	今後の課題	書誌情報
看護実践におけるプロフェッショナルリズムの概念	1	田尾雅夫 (1980)	看護婦におけるプロフェッショナルリズムの態度構造	1.看護婦のプロフェッショナル性を特長づける態度特性を明らかにする 2.特性群によって看護婦のプロフェッショナルリズムの態度構造を明らかにする	・看護婦におけるプロフェッショナルリズムの態度構造は、因子分析の結果から「責任性」「自己実現性」「自律性」の3つが生成された ・責任性は看護婦のプロフェッショナル性を特徴づける主要な態度特性であることが明らかになった	記載なし	病院管理,17,p289-296,1980.
	2	田尾雅夫 (1983)	プロフェッショナルリズムにおける態度構造の比較分析	プロフェッショナルリズムの動的な構造を明らかにする	・固定的な理想型に陥陥してプロフェッショナルリズムの動態を見ることは不可能であり、プロフェッショナルは今も動きつつある。このことを基本認識し共有しなければならぬ	記載なし	京都府立大学専修報告,35,p159-172,1983
	3	志自成一郎 (1998)	看護婦の専門職性の形成概念	看護婦の専門職性(プロフェッショナル)を構成する概念を明らかにする	・看護婦の専門職性を構成する概念として「知識と技術」に基づくケア」「患者の権利の尊重」「同僚や他職種との共働」「専門職としての自律」「看護という仕事への専心」の5つが明らかになった	記載なし	東京保健科学学会誌,1,p45-48,1998.
	4	高田望 朝倉京子,他 (2016)	看護婦の専門職意識を構成する概念の検討	看護婦の専門職意識を構成する概念を明らかにする	・看護婦の専門職意識を構成概念として、「高度な知識体系に関する意識」「公共意識」「自律意識」の3概念を抽出した。また、<高度な知識体系の確立><自己成長><知識の創造><教育水準の向上><倫理観><専門職組織への加入><職務志向><応召責任><業務の独立性><自律的な臨床判断力><専門職集団><専門職意識>が有する面々の尊重の12の下位概念を導出した	記載なし	東北大学医学部保健学科紀要,25,p47-57,2016.
	5	山本武志 河口明人,他 (2016)	医療プロフェッショナルリズム概念の検討	1. 医療プロフェッショナルリズム概念を検討し、職種間で提示されている内容の相違を検討 2. 1990年代以降の医療プロフェッショナルリズムの概念の変遷を考察し、医療専門職が社会から求められている役割・機能および専門職団体が規定するあり方がどのように変容しているかを明らかにする	1. 職種特長がテグロリはなく、3職種で提示されているプロフェッソナリズムの内容に大きな差はなかった 2. 医療のプロフェッソナリズム概念の検討の結果、概念の拡大・転換、すなわち量的な変化があった 量：20年の間に概念は拡大し、細小や消滅はなかった。そのため、新たな専門性や専門職を生だし、量的変化に對しての問題解決を促進した。一方で、新たな運轉の問題を生み出したと指摘している 質：1990年代は、患者を医療専門職の意思決定にいかにか参加させるかであった 2000年以降は、いかに患者の意思決定をサポートするか、すなわち、患者の自律性を尊重することが医療専門職の役割として変化していること述べている	プロフェッショナルリズム教育のプログラム構築 北海道大学大学院教育学研究院 アウトカム指標の作成を行うことが今後の課題 紀要,126,p1-18,2016.	
	6	倉島智美 常盤洋子,他 (2018)	看護婦のプロフェッショナルリズムに対する認識	看護婦が抱くプロフェッショナルリズムに対する認識を明らかにする。	・看護婦が抱くプロフェッショナルリズムは、「知識や技術」「自律的な行動」「職務に関する姿勢」「他者からの期待」「患者に対する姿勢」の5つの構造的に分類された ・各特性を構成する表現内容は、初期の段階では仕事の効果性に関する内容であり、経験年数を重ねることで看護婦としての在り方や患者への姿勢などへ変化していることを明らかにした	看護婦のプロフェッソナリズムに関する仮説検証型の研究デザインによる研究を進める必要があると考える	群馬保健学研究,38,p35-46,2018.
	7	小野寺美希子 (2017)	看護専門職とプロフェッソナリズム	看護専門職がいかにプロフェッソナリズムを形成するか、また看護婦がどのような特性を持ち、特性とプロフェッソナリズムがどのように関係しているかを明らかにする	・看護専門職における中心的概念としてのケアリング ・科学的根拠に基づくケアリングが看護プロフェッソナリズムには欠かせない ・ケアリングは他者の自立と自己実現を可能にするだけでなく、ケアを提供するもの成長をも促す ・ケアリングは相互作用によって展開 ・相互作用は、看護婦のプロフェッソナリズムといった信念や志向に働きかける、ケアリングに結びつく ・ケアリングの質は、経験と技能習得レベルによって変化する	ケアリングという概念を基にプロフェッソナリズム研究を推進することで、いかに看護婦がプロフェッソナリズムを形成するかが明らかになっていく	北海道大学大学院教育学研究,30,p115-121,2017.
	8	小野寺美希子 (2020)	プロフェッソナリズムの獲得メカニズム	看護婦のプロフェッソナリズムを構成する要素を明らかにする	・異なるキャリア段階における仕事経験を踏まえて、段階的に形成されている ・献身性と自律性のプロフェッソナリズムが、専断的な関与と専門技術の提供というケアリング行動を促進してケアリング行動を導いていた	職務固有行動は異なる点を視野に入れながら、人材育成研究、人材育成学会編 より詳細な検討を重ね、多様な職務においても、活用可能なプロフェッソナリズムの成長プロセスを包括的に解明すること	私府大学教育学部紀要,34,p91-103,2005.
	9	葛西敦子 (2005)	病院に勤務する看護婦の専門職意識の発展に関する研究	看護婦が勤務する看護婦の中でどのように専門職性を発揮し、実践しているのかを明らかにし、さらにその部分を強化してはいけはより専門職性が高まるのかを明らかにする	・看護婦の専門職性(プロフェッソナリズム)への実践に関する調査を行った。 ・看護婦の専門職性を構成する下位概念の自己評価の低いものが、<クライエントの総合的理解><患者の権利の尊重と擁護><専門的知識と技術に基づく看護実践>である ・自己評価の低いものが<専門職としての成長><他職種との連携、リーダーシップ能力>であった。 ・職位が上がることにより専門職性を発揮していることもわかった ・看護婦の専門職性の実践においては、<クライエントの総合的理解と責任の自覚>に最も専門職性を発揮し、看護実践していた。次いで<専門的知識と技術に基づく看護実践、専門職としての自律性および成長>であった。<研究的取り組み>ができてきたような教育環境、職場環境が望まれる	記載なし	私府大学教育学部紀要,34,p91-103,2005.

カテゴリー	NO	著者	テーマ	目的	結果	今後の課題	書誌情報
看護師の	10	西山 綾 田所 望(他) (2011)	本学(獨協医科大学)医学士および看護学生のプロフェッショナルリズム育成のための行動規範の作成とその評価	プロフェッショナルリズム教育導入に必要な学生の行動規範を作成する	・医療系学生のプロフェッショナルリズム育成教育には、学生の健康状態を良好に保つために、健康的な生活習慣を確立し、睡眠状態に影響するストレスを取り除く必要があることが示唆された	生活習慣改善による自己評価の変化が長期的に観察する必要があるため、継続して学部別に追跡調査を行う	国際教育研究施設年報, 3, p75-85, 2011.
の	11	西山 美樹 細田 泰子(他) (2018)	看護系大学の学生における看護プロフェッショナルリズムの認知度に関する調査	看護系大学の学生における看護プロフェッショナルリズムの認知度を明らかにする	・看護系大学の学生における看護プロフェッショナルリズムの認知として、[信頼形成の基礎となる態度]相互作用的な促進をめざすアプローチ[医療チームの一員としての責務]という3つのコアコンポーネントが生成された	プロフェッショナルリズムの涵養に向けた具体的な教育支援について考えることは今後の課題である	日本医学看護教育学会誌, 27, p1-8, 2018.
プロ	12	有江 文栄 (2019)	看護のプロフェッショナルリズムを育むために必要な行動規範	看護のプロフェッショナルリズムを育むために必要なことを明らかにする	・看護のプロフェッショナルリズムを形成するために医療倫理教育を充実させることが極めて重要である	記載なし	生命と倫理, 上海大学, 6, p 37-42, 2019.
フェ	13	難波 香, 木下 香織(他) (2020)	認知症ケアにおける学生の学び(第二報) 看護の役割と機能-Professionalism-に着目して	A大学看護学科の認知症グループホームでの老年看護学実習における学生の学びに関する専門職の専門性についての学びを明らかにする	老年看護学実習における認知症高齢者に関する専門職の専門性についての学生の学びとして、実習目標を、高齢者の認知症に関する他の専門職と機能と理解する (Professionalism) とした。実習の結果として下記が得られた ・プロフェッショナルリズムは、専門職倫理とも認められ、利他的奉仕など個人的なものに加え、専門科集団としての社会的責務や職業活動における倫理性が重視されていた ・学生は、自身が感じている倫理的課題であると認識し、多職種協働しながら、その時最善とするケアを提供することが専門職としての責務であると捉えていた	系統的に調査を行うとともに、認知症高齢者に関する専門職の専門性以外の実習目標についても、A大学の実習形態の特徴を確かめていく	新立公立大学紀要, 41, p141-146, 2020.
ス	14	武用 百子, 岩根 直美(他) (2018)	アクティブラーニングを導入した看護倫理演習が学生の倫理的意識や職業的アイデンティティ及びプロフェッショナルリズムに及ぼす影響	「倫理的判断をした行動を選択できる」という授業設計に基づいた看護倫理演習前後で、道徳的発達や職業的アイデンティティ、プロフェッショナルリズムがどのように変化しているかを明らかにする	・授業設計に基づいたアクティブラーニングを導入した看護倫理演習を実施し、道徳的感性、職業的アイデンティティ及びプロフェッショナルリズムがどのように発達しているかを明らかにした ・看護倫理演習後では道徳的発達感得点、職業的アイデンティティ尺度、プロフェッショナルリズム尺度とも、有意に得点が高まる傾向が明らかになった ・看護学生の道徳的感性を高めるためには、意図的に授業設計した教材を用い、またアクティブラーニングを導入した看護倫理演習が、効果があることが示唆された	他施設でも同様の介入を行い、参加者を増やし、日本看護学会論文集「看護教育」で検討する	学会雑誌, 6, p 9-17, 2018.
教	15	吉田 文子, 柳澤 佳代(他) (2018)	「臨床実習指導者研修セミナー2017」実施後の受講生に対するアンケート調査の結果より、プロフェッショナルリズム導入の効果を確認し、今年度評価と次年度の課題を明らかにする	「臨床実習指導者研修セミナー2017」実施後の受講生に対するアンケート調査の結果より、プロフェッショナルリズム導入の効果を確認し、今年度評価と次年度の課題を明らかにする	・プロフェッショナルリズムという言葉や概念については、セミナーではじめて知り得ており、理解を深めるために、その後のグループワークには有効であった ・プロフェッショナルリズムという言葉や概念については、研修講義やその後のグループワークにより教育観の再構築が行えた	参加者が学生同様に専門職として求める項目の在りか、学生指導モデルの編成を参考に明らかにしていく	看護研究, 10, p 67-76, 2018.
育	16	杉本 愛, 寺本 ゆみ(他) (2020)	多職種コミュニケーションが看護実践に及ぼす影響	看護と研修で構成したチームコミュニケーション前後でIPWがどのように変化しているかを明らかにする	・チームコミュニケーション前後で、看護職も研修医も多職種連携協働(IPW)は高まらなかった ・看護職は、職業的アイデンティティやプロフェッショナルリズムについても高まらなかったが、2回以上のチームコミュニケーションを実施していくことで、効果があるのではないかと考えられた ・看護職も研修医においても、チームコミュニケーション後のIPWとプロフェッショナルリズムが相関していることから、継続したチームコミュニケーションの実践がプロフェッショナルリズムを高め、IPWも高まる可能性があることが示唆された	記載なし	日本看護学会論文集「看護教育」50, p95-98, 2020.
シ	17	田中 理子, 米満 吉和(他) (2012)	Behavioral Inventory for Professionalism in Nursing (BIPN) 日本語版の信頼性と妥当性の検証	看護専門職性に関する行動調査票 (BIPN) 日本語版を開発し、その信頼性と妥当性を検証する	J-BIPNはの日本における看護専門職性を計測するための尺度として信頼性と妥当性を有することが示唆された。	記載なし	インターナショナルNursing Care Research, 11, p21-29, 2012.

原著 24 件であった、総説 4 件、解説 113 件、会議録 46 件、座談会 5 件、一般 1 件計 193 件であった。

原著は、24 件であった。1980 年は 1 件であったが、2012 年までの 32 年間はなかった。2013 年 2 件、2014 年 0 件、2015 年 2 件、2016 年 1 件、2017 年 2 件、2018 年 7 件、2019 年 4 件、2020 年 5 件であった。総説は 4 件、解説は 113 件であった。解説は、2001 年～2015 年は 0～5 件であった。2016 年 22 件、2017 年 16 件、2018 年 21 件、2019 年 14 件、2020 年 10 件であった。会議録は、46 件であった。1984 年に 1 件あり、25 年間なかった。2009 年～2017 年は 1～4 件であった。2018 年から 2020 年は各 7 件であった。座談会は 5 件、一般 1 件であった。

2. 看護師のプロフェッショナルリズムに関する研究の動向

著者、テーマ、目的、結果、今後の課題、書誌情報を一覧にした。(表 2)

テーマ・目的・結果の内容から【看護師のプロフェッショナルリズムの概念】(No.1,2,3,4,5,6,7)、【看護実践におけるプロフェッショナルリズム】(No.8,9)、【看護師のプロフェッショナルリズムに関する教育】(No.10,11,12,13,14,15,16)、【看護師のプロフェッショナルリズムの評価尺度】(No.17) の 4 つのカテゴリーに分類した。

1) 看護師のプロフェッショナルリズムの概念

看護師のプロフェッショナルリズムの概念に関する研究では、プロフェッショナルリズムの態度構造 (No.1,2)、プロフェッショナルリズムに対する認識 (No.3,4,5,6)、プロフェッショナルリズム形成と獲得のメカニズム (No.7) に分けられた。

田尾 (No.1,2) は、看護師のプロフェッショナルリズムの態度構造を因子分析し、[奉仕性] [自己実現性] [自律性] の 3 つを生成した。[奉仕性] については、看護師のプロフェッションを特徴づける態度特性であることを明らかにしている。また、プロフェッションは流動的という基本認識を共有しなければならないとしている。

志自岐 (No.3) は、看護師の専門職性 (プロフェッショナルリズム) を構成する概念として [知識と技術に基づくケア] [患者の権利の尊重] [同僚や他職種との共働] [専門職としての自律] [看護という仕事への専心] の 5 つを導出している。

高田ら (No.4) は、看護師の専門職意識の構成概念

として、[高度な知識体系に関する意識] [公共意識] [自律意識] の 3 概念を抽出した。また、下位概念として <高度な知識体系の確立> <自己成長> <知の創造> <教育水準の向上> <倫理観> <専門職組織への加入> <職務志向> <応召責任> <業務の独立性> <自律的な臨床判断働き方の裁量> <専門職集団> を示している。

山本ら (No.5) は、医師、看護師、理学療法士 3 職種の医療のプロフェッショナルリズム概念を検討し、職種特有のカテゴリーや、内容に大きな差はなかったとしている。しかし、概念の拡大、転換により質的量的に変化を認めた。量的な変化は、20 年間に概念は拡大し、縮小することはなかった。質的变化としては、1900 年代は、患者を医療専門職の意思決定にいかに参加させるかであったが、2000 年以降は、いかに患者の意思決定をサポートするかに変化したとしている。その結果、患者の自律性を尊重する医療専門職へ役割変化していることを明らかにした。

倉島ら (No.6) は、看護師のプロフェッショナルリズムの認識について研究している。看護師が抱くイメージは <知識や技術> <自律的な行動> <職務に関する姿勢> <他者からの信頼> <患者に対する姿勢> の 5 つの特性に分類している。各特性を構成する表現内容は、経験年数を重ねることで看護師としての在り方や患者への姿勢などへ変化していることを明らかにした。看護師のプロフェッショナルリズムに関する仮説検証型の研究が今後の課題であるとしている。

小野寺 (No.7) は、看護師のプロフェッショナルリズムの形成について研究している。看護師のプロフェッショナルリズム形成については、看護師の職業特性における中心的な概念としてのケアリングをあげ、科学的根拠に基づくケアリングが看護プロフェッショナルには欠かせないとした。ケアリングは相互作用によって展開し、信念や志向に働きかけ、ケアリングの質も、経験と技能の習得レベルも変化することを明らかにした。

2) 看護実践におけるプロフェッショナルリズム

小野寺 (No.8) は、看護師のプロフェッショナルリズムの獲得メカニズムについて、異なるキャリア段階の仕事を経験して、段階的にプロフェッショナルリズムが形成されることを明らかにした。献身性と自律性のプロフェッショナルリズムが、専心的な関与と専

門的技術の提供というケアリング行動を促したとしている。キャリア中期以降の仕事経験が自律性のプロフェッショナルリズムの醸成を促し、プロアクティブ行動を通してケアリング行動を導いていることを明らかにした。今後の課題としては、ケアリングという概念を基にプロフェッショナルリズムの研究を蓄積することを挙げている。葛西 (No.9) は、看護職の専門職性を構成する下位概念で自己評価の高いものは、＜クライアントの総合的理解＞＜患者の権利の尊重と擁護＞＜専門的知識＞＜技術に基づく看護実践＞であり、低いものは、＜専門職としての成長＞＜他職種との連携＞＜リーダーシップ能力＞であったとしている。職位が上がるごとに専門職性が発揮され、クライアントの総合的理解と責任の自覚に最も専門職性を発揮し、看護実践していたと指摘している。次いで専門的知識と技術に基づく看護実践は、専門職としての自律性および成長であると述べている。研究的取り組みは、最も実践されておらず、教育環境、職場環境の支援が望まれるとしている。

3) 看護師のプロフェッショナルリズムに関する教育

看護師のプロフェッショナルリズムに関する教育の研究は、看護基礎教育が5件 (No.10,11,12,13,14)、現任教育が2件 (No.15,16) であった。

看護基礎教育での研究では、西山ら (No.10) が、医療系大学の学生は、プロフェッショナルリズムの教育に対して、健康的な生活習慣を獲得し、睡眠に影響するストレス因子を取り除くことで、学生の健康状態を良好に保てることを明らかにした。今後の課題として、生活習慣改善による自己評価を長期的に継続して、学部別に追跡調査を行う必要性を述べている。

西川ら (No.11) は、学生へのインタビューデータから「信頼形成の基盤となる態度」「相互作用の促進をめざすアプローチ」「医療チームの一員としての責務」の3つのコアカテゴリーを看護系大学の学生に対する看護プロフェッショナルリズムの認知として生成した。

有江 (No.12) は、看護のプロフェッショナルリズムの要素を[人間性][社会性][自律性][利他主義][説明責任][能力]とした上で、プロフェッショナルリズムを形成するために医療倫理教育が重要であることを示している。今後の課題として、プロフェッショ

ナルリズムの涵養に向けた具体的な教育支援を考える必要性について言及している。

難波ら (No.13) は、老年看護学実習において、他の専門職を知り、看護の役割と機能を理解すること (Professionalism) を実習目標とした。プロフェッショナルリズムは、専門職倫理とも訳され、利他的奉仕など個人的なものに加え、専門家集団としての社会的責務や職業活動における倫理性が重視されているとして、学生は、実習において自身が感じたジレンマが倫理的課題であると認識し、多職種協働しながら、その時最善とするケアを提供することが専門職としての責務であると捉えていたと推察している。

武用ら (No.14) は、アクティブラーニングを導入した看護倫理演習を実施し、学生たちの道徳的発達尺度、職業的アイデンティティ尺度、プロフェッショナルリズム尺度の得点が有意に高まることを明らかにした。今後は、他施設でも同様の介入を行い、参加者を増やして検討していくことを課題としていた。

現任教育では、吉田ら (No.15) が臨地実習指導者研修において、「プロフェッショナルリズムと実習指導」「看護倫理：看護のプロフェッショナルリズムへ向けて」をテーマに研修を実施し、実施後にプロフェッショナルリズムセッション導入の効果についてアンケート調査を行っている。その結果からプロフェッショナルリズムという言葉や概念については、研修講義やその後のグループワークにより学びを深めることができたとしている。

杉本ら (No.16) は、現任教育において、看護職と研修医のそれぞれで介入群とコントロール群の研修成果について、尺度を用いて検証している。両者ともチームシミュレーション前後で多職種連携協働 (IPW) の目的である専門職の役割や裁量についての理解やチームで問題解決できる能力は高まらず、特に看護職は、職業的アイデンティティやプロフェッショナルリズムについても高まらなかった。両者ともに、チームシミュレーション後の IPW とプロフェッショナルリズムが相関していることから、継続したチームシミュレーションの実施がプロフェッショナルリズムを高め、IPW も高まる可能性があるとし唆している。

4) 看護師のプロフェッショナルリズムの評価尺度

田中ら (No.17) は、Millerら (1993) が開発した看護

師のプロフェッショナリズムに関する行動を測定する尺度 (BIPN: Behavioral Inventory for Professionalism in Nursing) の日本語版 (J-BIPN) を開発し、病院看護師を対象に調査して信頼性、妥当性を検証している。その結果、J-BIPN は日本においてプロフェッショナリズムを計測するための信頼性と妥当性を有することが示唆された。

VI. 考察

1. 看護のプロフェッショナリズムに関する文献の動向

193 件の文献の知見を整理し、看護のプロフェッショナリズムに関する文献の動向を考察する。

文献の年次推移を見ると、1980 年にプロフェッショナリズムの概念をテーマにした文献で始まっている。この背景には、1970 年前後に、社会学領域で専門職研究についての報告がされはじめ、看護職も看護師としての専門職性を考えるようになったと推測される。また、1987 年厚生省の「看護師制度検討会」報告書⁸⁾に記載された「21 世紀に期待される看護職の要件」に「専門職として誇りうる社会的評価を受けるものであること」と示され、社会との相互作用のなかで看護師の専門職性を考えるようになったことが推測される。これを契機として、わが国における看護師養成教育の高等教育化、すなわち大学化が進み看護師の専門職化への関心が高まり、看護師のプロフェッショナリズムについて研究されるようになったのではないかと推測される。

また、2009 年頃より徐々に文献数が増加し、2016 年からは年間 20 ～ 30 件と急激な増加が認められた。これは、変化する社会のニーズに応じて専門職としての看護師の役割が年々拡大したことによると考える。日本看護協会は役割の多様化に対応し、看護師の専門分化を進め、1994 年に専門看護師制度、1995 年に認定看護師制度を発足させた。発足直後は文献数の増加は認めなかった。しかし、専門看護師、認定看護師が経験を積み上げたことで専門職としての意識が高まり、徐々にプロフェッショナリズムの文献が増加したと考える。さらに 2015 年には、厚生労働省¹⁰⁾が「2025 年に向けて、さらなる在宅医療等の推進を図っていくためには、個別に熟練した看護師のみでは足りず、医師又は歯科医師の判断を待たず

に、手順書により、一定の診療の補助を行う看護師を養成し、確保していく必要がある」と述べている。このことから、特定行為に係る看護師の研修制度が開始された。特定行為に関しては、医師の指示による行為でなく、研修修了者が自律して自らの知識と経験から判断し診療の補助を実践するため、専門職としての判断が委ねられる。特定行為に係る看護師の研修制度により、看護師のプロフェッショナリズムに関心が集まり、文献数が増えてきたと推測する。看護師の専門分化は、専門職としての独自性を向上させ、現場での看護ケアの質を高め、役割モデルとなるスペシャリストの育成が推進されたと考える。本研究において対象文献を概観し、プロフェッショナリズムの形成に着眼した。しかし、プロフェッショナリズムの形成に関する文献は少なく、プロフェッショナリズム形成に向けての現状を把握することはできなかった。今後は看護師のプロフェッショナリズム形成について研究が進むことが、看護の質向上につながると考える。

対象者別分類においては、キーワードを「看護」にしたことから、対象者が看護師である文献が多くあった。しかし、その他の職種も対象となっており、どの領域においてもプロフェッショナリズムについての関心が高まっていることが推察できる。また、看護師のプロフェッショナリズムを考える際に、多職種との連携が重要であると考えた。

文献種別結果を考察する。文献種別を概観し、2016 年以降は医中誌の文献種別分類で、すべての文献種別が増加していた。これらは、文部科学省が、大学における看護系人材育成において、看護専門職としての価値と専門性を発展させる能力としてプロフェッショナリズムを教育内容に組み入れたことが、文献数の急激な増加につながったと考える。また、看護のプロフェッショナリズムに関する総説・解説・会議録文献が増加し、プロフェッショナリズムへの関心の高まりが感じられた。今後は、全体の中でも数が少ない、医中誌分類における原著論文も、増加することが期待される。

2. 看護師のプロフェッショナリズムに関する研究の動向

抽出した看護師のプロフェッショナリズムに関する研究論文 17 件で、看護師のプロフェッショナリズム

ムに関わる研究の動向を考察する。

看護師のプロフェッショナルリズムに関する概念は、1990年代より、看護のプロフェッショナルリズムの概念化に向けて議論が重ねられてきたが、宮田¹¹⁾は「普遍的・包括的定義はない」と述べるように、今回の対象文献においても概念は統一されていなかった。宮田¹¹⁾は定義されない理由として、「時代や社会状況、医療のコンテクスによってさまざまなプロフェッショナルリズムの問題がある。また、学術的な立場によりプロフェッショナルリズムをどのように考えるかは異なってくる」とし、概念の統一は困難であることを述べている。しかし、概念の表現に違いはあるが、プロフェッショナルリズムの構成概念には、内容的に共通するものもある。田尾 (No.1) が、「奉仕性・自己実現性・自律性」を挙げ、高田 (No.4) は、「高度な知識体系に関する意識・公共意識・自律意識」を挙げている。表現は違うものの、文献を精読した結果、自律性や公共性といった専門職の特性として捉えられ内容は類似性があった。また、田尾 (No.1) と高田 (No.4) の文献は36年間経過していても類似するところがあることがわかった。しかし、山本 (No.5) は、1990年以降の概念の変遷を検討し、「科学的根拠に基づく医療・ケア」「専門職連携・協働におけるコンフリクト・マネジメント」「安全文化の普及・推進」など新しい概念が登場しプロフェッショナルリズムにおける概念の拡大がみられ、患者意思決定の参加から、患者自律を尊重するなど、概念の質の変化もみとめられたと述べている。田尾 (No.2) は、固定的な理念型に固執することによってプロフェッショナルリズムの動態を見ず、今も動きつつあるという基本認識を共有しなければならないと述べている。専門職か否かを議論するのではなく、求められる医療に応じてプロフェッショナルリズムが変化することを念頭に置き、変化する概念を捉え、時代にあったプロフェッショナルリズムを形成していくことが重要であると考えた。

社会学における専門職研究では、専門性や自律性など専門職の特性が議論されてきた。そして、「特性論的アプローチ (理論的に構成された理想像)」が評価され、看護専門職の特性を明らかにすることで、専門職化を図ってきた⁴⁾。研究論文の中では、ほとんどが専門職の特性を尊重した考え方で概念化されて

論じられていた。しかし鶴沢¹²⁾は、「現代の日本では、社会学が議論されてきた特性論的アプローチの考えとは異なった定義で専門職を捉え始めている」と述べている。看護師が有する機能や役割が表現されていない特性論的アプローチとは異なり、専門職性を捉えた看護師独自の概念が求められるようになったと考える。この考えと同様な論文は、小野寺 (No.6,8) のケアリング概念の研究である。看護師が概念を捉える際に、看護の専門職性を捉えることは、専門職の本質を捉え、医学に準拠された看護学でなく看護学独自の概念枠組みとして確立され、専門職への一歩にもなると考える。そしてそれらが、看護師の信念となりプロフェッショナルリズムが形成されると考える。

看護師の看護実践におけるプロフェッショナルリズムの研究は、2件 (No. 8,9) であった。小野寺 (No.8) 葛西 (No.9) は、看護実践の場において、経験や、看護師の職位が上がるごとに専門職性が発揮され、専門職としての自律や成長が促されると述べている。しかし、看護師のプロフェッショナルリズムが看護実践の場でどのように形成されているか、また、形成を促すための働きかけや組織としての取り組み等の研究は少ない。浅香⁵⁾は、「臨床看護実践の場は、時間の不足が理由となり、十分な成果や普及が期待できない。役割認識はあるものの、臨床の看護師にその時間がない。しかし、ひと昔前と違うのは、臨床の課題を研究へとつなげようとする看護師が散見されることである。臨床経験をした看護師が、大学院進学を目指すケースが増えている。」と述べている。看護実践の場での研究が進まない要因は種々あるが、看護の質を向上させるためにはプロフェッショナルリズムの形成は重要であり、看護実践者と研究者が協働しながら研究に取り組むことが求められる。

看護師のプロフェッショナルリズムに関する教育の研究は、看護基礎教育と現任教育にわけられる。看護基礎教育においては、倫理教育や臨床実習においてプロフェッショナルリズム形成に向けての教育が実践されており、看護学生なりの捉え方が育まれていることが推察された。しかし、まだ研究は少なく、西川 (No.11) が今後の課題に挙げているように、具体的な教育支援については明らかになっていない。また、現任教育でも十分な研究が進められていない。

今後は、多職種とのシミュレーション教育を継続することで職業的アイデンティティやプロフェッショナルリズムが形成されることが示唆されていることから、教育に活用しながら、プロフェッショナルリズム形成に向けての方略を検討していく必要がある。

看護のプロフェッショナルリズムにおける評価尺度の研究は1件(No.17)で、海外の尺度の日本語版の開発であった。プロフェッショナルリズムを形成させ育み促進させていくためには、評価が重要になってくる。高田⁴⁾は、多くの研究者が関心を寄せているテーマであると述べている。文献193件の中には学会発表の抄録も多く含まれていた。その中には、プロフェッショナルリズムに関する新たな尺度を使用した研究発表が複数あり、今後は研究論文として公表されることが予測される。

3. 看護師のプロフェッショナルリズムに関する今後の研究課題

対象文献を概観し動向を見ていくと、研究論文は増加傾向にあるものの、プロフェッショナルリズムの形成の研究は稀少であった。今後の研究課題として、看護師のプロフェッショナルリズムに関する研究の蓄積や、形成に向けて研究を進めていくことが重要である。また、概念の構築だけにとらわれずに、社会と医療の変化を捉えながら一人ひとりが看護師のプロフェッショナルリズムを形成し実践できるような研究が求められる。今後は、看護師の大半を占めるジェネラリストが自覚と役割を捉え、価値を見出し、自律に向かえるようなプロフェッショナルリズムの形成に関する研究が発展していくことで、看護の質の向上につながることを考える。また、看護基礎教育と現任教育での継続教育が必要であり、鈴木¹³⁾は、看護学生から新人看護職員への円滑な役割移行に、看護基礎教育と看護継続教育の協働が必要であることを示唆している。しかし、看護基礎教育と現任教育の継続教育に向けて協働できていないことが明らかとなった。今後は、研究によって現状把握と今後の課題を明らかにし、連携に向けて取り組まれることを期待する。

評価尺度については、現在研究が進められている段階である。さらに今後、評価尺度が開発され、実践で活用されることで、教育においても、看護実践の場においても目標と課題が明確になり、目指すべ

き目標を各個人が捉え、自律的な取り組みや、組織としての支援も具体的になると考える。

今後は、看護師のプロフェッショナルリズムに関する研究が発展し、看護師一人ひとりがプロフェッショナルリズムを形成することで、自信と誇りをもってそれぞれの立場で、それぞれの役割をその人らしく看護実践でき、看護の質を向上させるのではないかと考える。

VII. 結論

1. 看護師のプロフェッショナルリズムに関する文献は、1980年から発表されており、以後は文献数が少なく、2016年以降増加傾向にある。
2. 文献種別は解説・会議録が多いが、2018年以降は研究論文が増加している。
3. 研究論文17件の研究目的、結果の内容から、【看護のプロフェッショナルリズムの概念】、【看護実践におけるプロフェッショナルリズム】、【看護師のプロフェッショナルリズムに関する教育】、【看護師のプロフェッショナルリズムの評価尺度】の4つのカテゴリーに分類された。
4. 看護師のプロフェッショナルリズムの概念は、自律性、公共性などの普遍的な概念とともに、新しい概念が提起されており、時代の変化に応じたプロフェッショナルリズムを探究していく必要がある。
5. 看護基礎教育および現任教育におけるプロフェッショナルリズム形成の方略について検討していくことが今後の課題である。

VIII. 本研究の限界

本研究における文献の抽出基準に合致する文献のみの結果である。

IX. 利益相反の開示

本研究における利益相反は存在しない

引用文献

- 1) 厚生労働省ホームページ：看護学教育モデル・コア・カリキュラム,2017.
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/

- koutou/078/gaiyou/1397885.htm
(閲覧日 2021.11.20)
- 2) 久米龍子, 久米和興: 看護師の専門性に関する - 考察, 豊橋創造大学紀要, 16, p79 - 92, 2012.
 - 3) 永山正雄: 白衣のポケットの中: 医師のプロフェッショナリズムを考える, 医学書院, 2009.
 - 4) 高田望: 看護の専門職性に対する態度尺度 (ANPS) の開発および信頼性と妥当性の検討, 東北大学機関リポジトリ, 18572, p1-112, 2019.
 - 5) 浅香えみ子: 看護職論の視点から看護師の専門職性を考察する, 日本病院会雑誌, p52-57, 2019.
 - 6) 日本看護協会: 看護にかかわる主要な用語の解説, 2007.
<https://www.nurse.or.jp/nursing/education/keizoku/index.html> (閲覧日 2021.12.10)
 - 7) 林有学: 役職を持たない看護師のジェネラリストに対する認識, 日本看護研究学会雑誌, 40, p387, 2017.
 - 8) 厚生労働省ホームページ: 資格認定制度について, 2021.
https://nintei.nurse.or.jp/nursing/qualification/about_institution (閲覧日 2021.11.20)
 - 9) 厚生労働省ホームページ: 特定行為研修に係る看護師の研修制度, 2021.
<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/AA10K-0000077077.html>
(閲覧日 2021.11.20)
 - 10) 日本看護協会: 継続教育の基準, 2000,
<https://www.nurse.or.jp/nursing/education/keizoku/index.html> (閲覧日 2021.11.28)
 - 11) 宮田靖志: プロフェッショナリズムの概念・要素について, 医学教育, 1, p35-44, 2020.
 - 12) 鶴沢由美子: 現代日本における「専門職」の意味, 明星大学社会学研究紀要, 36, p127-137, 2016.
 - 13) 小山田恭子: 我が国の中堅看護師の特性と能力開発手法に関する文献検討, 異本看護管理, 学会誌, 13, p.73-80, 2009.
 - 14) 鈴木美和: 看護基礎教育と継続教育の連携による役割移行への支援, 看護教育学研究, 20, p21, 2011.